

## 敗戦後における新雑誌『新建設者 報徳青年』と草場弘の思想

見城 悌治

はじめに

二宮尊徳の思想と行動を、近代日本に継受した団体に、大日本報徳社がある<sup>①</sup>。同社は、民衆の経済的互助組織として機能しつつも、「道徳教化団体」としての役割を持ち、十五年戦争下においては、国策に協力する役割も担った<sup>②</sup>。しかし、GHQが一九四六年に「二宮尊徳は民主主義者である」と高評した事（後述）などもあり、戦後日本での活動を継続していくことになる。

一方、一九四七年五月に「報徳青年運動本部」なる団体が東京で創設され、『新建設者 報徳青年』と題した雑誌を発行した。この雑誌は、国立国会図書館のプランゲ文庫に創刊号からの一〇冊（四七年五月～四九年九月）、北海道大学附属図書館に二〇冊（四七年五月～五二年八月）の存在が確認できるのみで、報徳運動に関係が深い地域の静岡県立図書館、神奈川県立図書館等にも保管されていない（小田原市の報徳博物館には一冊だけ所蔵されている）。また、大日本報徳社の「社史」として編纂された八木繁樹『報徳運動一〇〇年のあゆみ』<sup>③</sup>は、一三四二頁にもおよぶ大著であるが、同誌への言及は一切ない。

そうしたなか、この『新建設者 報徳青年』誌（以下『報徳青年』と略）を、筆者は古書店から四五冊（四七年五月～五四年一月発刊分）を入手する縁を得た<sup>④</sup>。未知の雑誌とも言える同誌を用いた研究はほとんどない<sup>⑤</sup>。

この雑誌を発刊し、「報徳青年運動」を展開した中心人物は、草場弘（一九〇一～？）であった。戦前戦中期に青山師範学校教諭に就いていた草場については、教育史家の長浜功が、「皇国民養成」を鼓吹した「教育ファシスト」と厳しく指弾しているが、今日では忘れられた人物と言つてよいだろう。

近代を生きた尊徳門人によって、あるいは同時代の社会によって、時代適合的に読み直されていった報徳思想を、筆者は「近代報徳思想」と呼ぶが、この雑誌での議論もその一つと見なすことができ、その展開・推移や担い手の思想について、強い関心を持たざるを得ない。本稿では、『報徳青年』誌の特質を、その中心にいた草場弘の「個性」も併せて検討し、戦後日本において、報徳思想／運動がどのように用いられたのかの一端を探ることを課題とする（新資料とも言える『報徳青年』誌は、分量も少なからずあるため、本稿では、概要紹介に留まることを最初に断っておきたい）。

### 一 戦時下における報徳教育運動の展開

#### 1 草場弘とは誰か

一九四〇年前後の大日本報徳社が、朝鮮総督府や「満州国」からの要

請で、現地での講演会を実施し、さらにまた「大東亜共栄圏」を正当化する論説を幹部が発表するなどの戦時協力をしてきた事を、かつて筆者は明らかにした<sup>⑤</sup>。一方、報徳思想は、戦時下教育ともリンクしていくのだが、それについては、須田将司の精力的な研究がある<sup>⑥</sup>。

本章では、戦時下教育と報徳の関連を、草場弘に即して確認していくことを課題とするが、まず草場の履歴を紹介しておこう。一九〇一年、福岡県朝倉郡馬田村（現甘木市）の農家に生まれた草場は、一九二五年京都大学哲学科卒業。一九二六年から青山師範学校教諭となり、積極的な教育実践に取り組んでいく。執筆意欲もきわめて旺盛で、著書も多い。主な著書に、①『教育者は悩む』（一九三二年）、②『教育者・世を導かん』（三四年）、③『皇民錬成の哲理』（四〇年）、④武田勘治と共著『吉田松陰と教育者精神』（四〇年）、⑤小西重直と共著『大東亜戦争と教育者の決意』（四二年）、⑥『国民学校師道論』（四二年）、⑦『皇国民錬成の大綱』（四四年）等がある。

一九四三年三月には青山師範を退職している（理由は不明）が、⑦は「翼壮（大日本翼賛壮年）中央道場塾頭」の肩書で出版しており、敗戦時まで精力的に活動していたものと思われる（戦後の動向については後述するが、没年は不明である）。

## 2 戦時下における草場弘の「教育論」とその展開

一九三八年一〇月に「国民訓育連盟」という団体が誕生した。「訓育即教育」という考えを取ったこの連盟は、「明治以来の近代教育が外来文化の摂取消化過程にすぎず、日本精神に基づく訓育が疎外されてきたという同連盟の認識は、ひとつの近代学校批判の表われであった<sup>⑧</sup>」と、現在理解されている。つまりは、反西洋を標榜し、「日本精神」を醸成する教育団体とされるのだが、草場はこの理事長職にあった。

この連盟が、一九四〇年春に行った「第四回 教育と行の講習会」の記録が残っている<sup>⑨</sup>。主な講師と演題を挙げると、荒木貞夫「興亜皇民錬成の識見」、安岡正篤「教育者と社会観」、小西重直「実践実行に就いて」など大物の顔が並んだが、草場も彼らに負けず、千名もの参加者を前に「道義世界の確立」を講じている。

同じ年の春に玉川学園で開かれた別の講演会<sup>⑩</sup>では、「皇道「行の教育」事理」を語った。また同じ場で、加藤仁平（東京文理大助教授）が「皇道史観と新興報徳教育」という講演をしていたことには留意しておきたい。さらに一二月、七回目の「教育と行の講習会」が小田原で開かれた。開講の挨拶に立った草場は、「行」を離れた「教育」は抽象論であり、又「教育」を考えない「行」は人間を機械化することを考へまして、「教育即行」、「行即教育」といふのが、吾々の考へである<sup>⑪</sup>。そして「興亜の先哲、理論と実践の体験者であり、さうして偉大なる世の救済者<sup>⑫</sup>」であった尊徳を中心に置く講習会を設けたと説明した。

そしてこの講習会のテーマは「尊徳哲理の参学と報徳常会の体認」とされ、翌年『尊徳哲理の教育』として発刊されることになる。同書の内容は▽報徳精神と日本の教育（大日本報徳社副会長・佐々井信太郎）、▽尊徳と興亜の哲理（青山師範学校教諭・国民訓育連盟理事長・草場弘）▽報徳常会について（大日本報徳社・藤田訓二）▽報徳教による学校経営（富山県社会教育課・松田富雄）▽尊徳先生道歌講話（草場弘）、および座談会記録「常会の体験」であった。

草場の講演の一部を紹介しておこう。曰く尊徳の哲理には「皇国の哲理、荒蕪開拓の哲理、空の哲理」がある。「興亜の大業といふものは、正に斯の如き立場に立つものでなからうか」。「日本精神を観念的に考へて、支那に植ゑつけんとするが如きは、興亜の大業を邪魔するものである。己を空しくして、支那民衆の声に耳を傾け、己を無くして支那の人々の

幸福を考へよ」。「日本のみをよいと考へる時は、争を生ずる。日本のみが進み行く限りは戦になります。斯くて、私は二宮尊徳先生の空の哲理は東洋哲理の根本であり、興亜大業の源泉だと思ふ。第二には興亜の大業は亜細亜の荒蕪を開拓する者である」。「今吾等が東洋の文化を建設するに当りまして、神道中心といふものであつてはならないでありませう。一切を打つて、一丸となし、それを練り上げて東洋の正味一粒丸が生れなければならぬ」。「二宮先生の体験的方法といひ、行としての科学といひ、さうしてその哲理といひ、〔中略〕興亜の大業の最も必要な大道、最も深い東洋哲理である」云々。

このように尊徳の「哲理」を高評する草場は、尊徳が自らの思想体系を「神道ひと匙、儒仏半匙」からなる「正味一粒丸」と称したのをもじり、「東洋の正味一粒丸」を作るべしと主張した。しかし、ここで注目されるのは「神道中心」を排し、観念的な「日本精神」の押し付けも否定する。自己中心的姿勢を批判し、ともにアジアを興すべしと主張するのである。

しかし、一九四二年一月の「大東亜戦争下の国民教育」では、次のような叫びに転ずる。「全国民学校の職員は次の三つの覚悟を新たにしなければならぬと思ふ。一 大東亜建設の中心人物たることを以て自ら任ずること、一 アジア経綸を胸に描いてやまざること、一 国民学校の児童たる少国民をアジアの柱として錬成すること」である。「児童は既に一家族の子供ではないのである。天皇の赤子であつて、天皇のみこともちでアジアの柱たる未来の大人物である」。「アジアの天地は地球の大半を覆うてゐる。荒蕪未開拓の土地、山、河、原野、山林、而して未開民族がどれ位あるか分らぬ。今これらは日本民族を中心として、新に開拓創造されねばならぬのである」云々。<sup>15)</sup>

事ここに至ると、「天皇の赤子である日本民族がアジアを開拓する」と

いう使命を、教育においても強く顕現すべきことが草場によって主張されるのであった。

草場弘のこのような行動や発言について、長浜功は「熱烈な皇民教育の推進者であり、皇民翼賛のイデオログであった」と厳しく指弾する。それは確かに妥当な評価と言えよう。さらに、長浜は続けて草場を「戦後におけるものの見事な変身ぶりをあざやかにやってのけた極めつけの人間」とも断罪する。<sup>16)</sup>

ここで、長浜が言う「戦後の変身」とは、どのようなものであったのか。それについて確認するのが、次章の課題となる。

## 二 敗戦後における社会変動と『報徳青年』の発刊

### 1 敗戦と大日本報徳社の動き

大日本報徳社の機関誌『大日本報徳』の一九四五年一二月号は、「終戦号」と銘打たれ、巻頭に次の文が掲げられた。「眼前最も急務とする所は、食糧充足に最大の努力を払ひ、インフレーション防止に有ゆる工夫を講じ、国民道義の昂揚と皇国の天徳弥が上に発揚することでありまして、その方法として大戦前から報徳の教によって、承詔奉行に誠を致した様に、戦後経営、再復振興、新生日本の建設とも称せられる方法は報徳の道によるを最上と存じます(五頁)」云々。<sup>17)</sup>

大日本報徳社は、戦時下で展開していた食糧増産運動を、戦後も継続することを第一義としつつ、「新生日本の建設」には報徳が有用なことを主張したのである。四五年一二月には、戦前から継続していた長期講習会の看板を「国民新生活報徳研究会」と変え、「再生の希望を与え、再起建設の意欲を促すべく」実施したところ、定員の五〇名を越える申し込



みがあったと言う。<sup>18)</sup>

敗戦時の大日本報徳社社長は河井弥八（貴族院議員・侍従次長などを歴任）だったが、四六年四月二八日、副社長・佐々井信太郎等が、高松宮宣仁親王に招かれ、「報徳の指導精神をもって、新日本建設の推進に努力してほしい旨の御希望」を寄せられたとされる。さらに六月一日、GHQの新聞課長ダニエル・C・インボーデン少佐が、加藤仁平（東京文理大学教授）の斡旋で、大日本報徳社を訪問する。その際、河井弥八から説明を受けた少佐は「尊徳翁はアメリカのリンカーンにも比すべき人物である」と激賞したと言う。<sup>19)</sup>

また九月四日には、小田原で「報徳連合会」が発足し、理事長に中川望（内務官僚）、河井・佐々井等が理事職に就いた。この会には、インボーデン少佐も夫妻で出席し、「尊徳は日本最初の民主主義者」と高評したのみならず、吉田茂首相、内山岩太郎神奈川県知事からも祝辞があった。また会合では「日本再建上、報徳の行なうべき具体策」について、熱心な意見の開陳があった。発言者は、加藤仁平・津田光造・清水文雄・加藤勝也・草場弘・小林孔・井上昂一・原尻東などで、その後「報徳道振興に関する建議」および「大会決議」がなされたと言う。<sup>20)</sup>

このような過程を経て大日本報徳社ならびに報徳運動は、GHQのお墨付きを得、戦後社会に継続できることになったのである。その背景の一つには、リベラル派と目されていた河井弥八が果たした役割も大きかったとの指摘もあるが首肯できるところである。

## 2 『報徳青年』の発刊と草場弘

辱知各位 お元気でせうか。私は元気で敗類革新流転交錯の中に、相変わらず青年と教育と農村を中心に日本再建の道に努力しつづけ、昨年初め「建設」誌の刊行を計画し、それが漸く成長結実して、同

志と共に報徳青年運動となり、ここに「報徳青年」の刊行となりました。（中略）一人半人にも同志をつくり、祖国革新の命脈となつて下さいませんか。お願ひします。

昭和二十二年五月一日 草場弘

この手紙は、「全国の青年に訴うー日本再建の意気にもゆる「報徳青年」愛読者一万へー」という見出しから始まる一枚物の「概文」の後半部に印刷されていたものである。これは『報徳青年』の創刊号に挟み込まれていたものだが、前半部の概略は、以下の通りである。

・「今、日本国民八千万の使命と目標は、只祖国の再建と独立あるのみです。そして、全国二千万の青年諸君は、その建設者であり、その中核であります。／再建と独立には、原理と方法がなければなりません。／『報徳青年』は日本復興独立の道を研究する月刊雑誌です。」

・「ポツダム宣言によるも、平和民主化は、日本再建独立の唯一の道です。『報徳青年』は、平和民主化のための月刊雑誌です。民主化は、先づ一人一人の勉強から始まるのです。勉強にはいろいろ何でも読むのと、何か中心をきめて読むのと二つの方法がありますが、本誌は日本最初の世界的民主主義者二宮尊徳に中心をおいて勉強をやってみようと思うのです。殊に読書する時間の少い勤労青年諸君には、この方法がよいのではないでせうか。」

・『報徳青年』は働く青年のために生れたものです。然し主義やイデオロギーの宣伝雑誌ではありません。報徳の研究をしますが、政治・経済・思想・文芸・科学等ひろく取扱って、青年の眼界を高くひろく大きくしたいと願ひしてあります。」

・『報徳青年』は店頭には出しません。（中略）同志が本誌を台本として、読書会・研究会・座談会等をつくり、部落町村青年会等の民主化

の原動力になってほしいのです。」

・「紙のヤミと一切の物価高のため、そして読者がまだ五千以内であるため、〔下略〕定価が高いのが残念。安くするため、インフレ追放と読者が一万人になることを願う。」

発刊者が「定価が高い」と自嘲した雑誌代は、一ヶ月金十円（送料一円五〇銭）、一ヶ年百二十五円（送料共）であることが、最後に示されていた。<sup>22</sup>

文責者は、「東京都千代田区神田神保町 三ノ一七」新建設者 報徳青年」出版 天地社 / 報徳青年運動本部」とされていたが、この檄文の後ろに草場の署名入りの先の「手紙」が付されていることから、檄文も草場が書いたものと推測される。

さて、戦後日本で、報徳が再認知された場となった「報徳連合会」（四六年九月）に、草場が参加していたことを先に見た。しかし、草場は、大本報徳社とは直接的な関わりは持たなかったと思われる。<sup>23</sup> その一方で、戦時下の「報徳教育」に力を入れていた加藤仁平<sup>24</sup>とは講演会仲間でもあり（前述）、戦後も関係性が続いていたようである。たとえば、加藤の自伝には、この運動の協力者は「草場弘、古屋安定の両氏である。草場氏はずいぶん、雑誌を出したいという相談で、これは同氏の尽力で『報徳青年』の発行となった<sup>25</sup>」とある。また、加藤が創刊に関わった『民主報徳』（二九四八年四月一日）には、「振り立つ報徳青年運動」という記事が次のように載せられている。<sup>26</sup>

「二宮翁生誕地の小学校長（引用者―桜井小学校長） 古屋安定、台湾から引揚げて来た津田光造の両氏と文理大の加藤仁平博士との間に、一、新日本の建設は青年のふん起から、二、青年運動の指導精神は報徳で、三、報徳運動は新時代に即応する方法でなければならぬ、として種々画策が始っていた、そこへ「人は尊徳、山は富士」と千葉、群馬の青年

をあん内して富士登山を兼ねて、二宮翁の生誕地へ現れた草場弘氏の参画に依って頓に計画が進行し」た、云々。

これらの経緯については、現状でこれ以上分らないのだが、加藤が草場に何らかの協力をしたことは間違いないようだ（加藤は、のち草場が創刊した『報徳青年』誌に何回か寄稿することになる）。

さて、この顛末については、『報徳青年』創刊号（一九四七年五月）からも確認できる。すなわち、草場筆の「もり上る青年報徳運動」によれば、四六年七月二〇日に、小田原郊外の栢山で、「群馬・千葉の青年男女四十二名が、地元の桜井青年団八十名と交歓談話会を催した」（これらの青年が集った経緯や理由は書かれていない）。さらに記事は、こう続けられる。

終戦後一年の各青年の虚脱状態から、やっと立ちあがらうとしてゐるもだえ苦みを、腹をわって語り合ひ〔中略〕二宮金次郎先生の遺跡を歩いた感激が、じーんと沁みこんでゐた。〔中略〕

「今日、日本最初の民主主義者と進駐軍に驚嘆されて、今や世界の偉大なる救済者ならんとしてゐる二宮先生の根本は、この栢山での二十四歳迄の苦難と努力と修養によつて養はれたのであります。青年時代がその根本です」との草場先生の言葉。

ああ。わが農村を再建日本の基盤とする道は、二宮精神を新にする外にはないのではないか。「青年報徳運動こそ、この敗亡の日本を救ひ、世界的平和永安の国たらしめる唯一の道である」と、草場先生の今の挨拶」（一一―一二頁）。

そして、翌日、全員で富士山に登った後、千葉、群馬にそれぞれ帰り、地元で運動を興していったとされる。

次いで、九月二―五日、栢山の報徳道場に、関東出身者を中心に岩手や静岡からの青年六四名が集合。「報徳研究講習会」を催し、「報徳青年

運動」を決議。本部を栢山の桜井国民学校におき、かつ各県に支部をおくことを定め、毎年九月と二月に講習会を行い、その機関誌として『報徳青年』の発刊を希望したため、そこから「報徳青年運動」が始まった（二三頁）」と、草場は説明を加える（最終的に「本部」が東京に置かれた経緯は不明）。

ところで、そもそも草場自身は、敗戦後の青年の役割と報徳運動をどう捉えていたのだろうか。

日本の青年は今日悉く心の底に祖国を興し、日本を再建したい念願に燃えてゐる。只その方法が分らず、その道が見えないためにやむなくじつとしてゐる。この可燃性の青年に、この祖国復興日本永安の報徳原理方法の火を点じたならば、忽ちにしてめらめらと燃えて、やがて天をこがす火の柱となつて、日本再建のゆくてを照らすであらう。これ今日報徳青年運動の必要なる所以であり、青年に報徳の研究と実践に一日も早く立ち上つて貫はなねばならぬ所以である（二三頁）。

つまり、「進駐軍に驚嘆」されている報徳が、「日本再建」の方法として、最善のものであると理解し、それゆえ、青年に修得して欲しいと切願していたのである。

### 3、運動の展開と広がり

#### ①千葉県での動き

創刊号によれば、四六年七月、栢山で熱く語りあつた千葉県夷隅郡大原町（現いすみ市）の青年一〇名は、帰郷後、地元青年三二名に働きかけ、朝四時からの草刈り作業を始めた。そして、農産加工場設置、野菜共同出荷、共同耕作場経営、加工品販売、青年団運動会の実施などを続々展開した。一月には三〇代の壮年も報徳会に加入、二月は三万円

協同出資でモーターを買い、精米精麦加工場を設置した。そして、「今や農地制度の改革をこの報徳によつて円満に解決せんと研究をすすめてゐる」云々（二二頁）。

これに従えば、「報徳」を学んだ大原の青年は、地域の経済「建設」に大いに貢献したことになる。さらに驚かされるのは、青年報徳会が、四六年一月三日の日本国憲法発布から、「この日を新日本の紀元元年元旦として、大原を新日本の魁たらしむべく、毎朝雞晨太鼓を鳴らし、邑民覚醒の合図とせり」としたという記述である（一四頁）。

戦前国家をリセットした上で、新憲法を「新日本の魁」とし、自らが「新建設者」になるという類まれな発想が、彼らの中から生まれたことは「戦後思想」の展開として、きわめて興味深い事例である。<sup>27)</sup>

#### ②群馬県での動き

群馬の青年たちも、群馬県碓氷郡安中町（現安中市）、八幡村（現高崎市）で、館工場、藁工場、せんべい加工、製縄製筵の実践を開始した。また翌四七年二月二日から五日には同地の公民館で報徳を中心に「農村青年修養講習会」を開催したという。

「新憲法に基づいて、我々は新たな出発をする」と宣言した千葉県大原青年の如き派手さはないものの、確実に経済の活性化を担う存在になりつつある事が報告されているのである。

#### ③神奈川県栢山での動き

四六年九月の講習会に続き、翌年一月二八〜三一日に、栢山で、報徳青年運動本部主催の「青年報徳研究講習会」が開かれた。参加した四三名は「農地改革等目前に横わる農村民主化のために協力まい進する心を固めて、それぞれ帰郷した」とされる。<sup>28)</sup>

#### ④運動拡大への訴えと現実

創刊時の檄文に、読者は現状で「五千以内」なので、「一万人」以上欲



しいとあったが、四七年七月号でも「誌友は約一千人であります。雑誌経営の上からもこれでは毎月毎月欠損がつづきます。(略)報徳青年の力で、日本を再建するには、三万の同志誌友が絶対に必要です(九五頁)」と叫ばれていた。五〇年八月号にも「本号から一年以上送金のない人々を整理して、一千の会員となります。志のない烏合の多数より同志の少数で新しい発足をし、本当の人間と農村とを築いていきたい(四一頁)」との記事が見え、広範な大衆運動には必ずしもなりえなかった現況が吐露されていた。

これらの状況から、「報徳青年運動は影響力を持たなかった」と結論づけても良いのだが、『報徳青年』の誌上では様々な議論が展開されていた。その中には、戦後思想史の問題として、興味を惹く議論もあるため、次章はそれらの検討に当たりたい。

### 三 『報徳青年』誌にみる「民主主義」、「平和主義」、農村文化の促進

#### 1 二宮尊徳の思想と「民主主義」

草場弘は、三・四号合併号(四七年一〇月)に「民主主義と尊徳」と題する論文を載せ、封建社会に生まれながらも「尊徳の生き方はきわめて民主的であった」(八七頁)と断言した。また「民主主義とは民衆が共にはかり、共に力をあわせ、共にことをなすのであり、したがって憂いを共にし喜びを共にしていく生活である」が、尊徳が小田原藩家老の服部家の経済再建に成功したのは、服部家全員の協力を得たからだと評する(九一頁)。

さらに「尊王とか支配階級打倒とかのいわゆる革命に狂奔していくこ

とも民主主義の一つの表現であろうが、眼前に苦しみ、さいなまれ、しいたげられ、飢えて死んでいく人民大衆を救済して、それに人間本来の生活に立ちなをらせることもそれに劣らぬ民主主義に殉ずるものに行くべき道ではなかるうか。二宮尊徳ははなばなしい暴力革命の民主主義ではなかった。しかしいかなる暴力革命の人物よりも、人民を愛し人民のためにたたかい、人民のために働きぬいた民主主義者であったのではなかるうか(九四頁)と結んだ。

草場が「暴力革命も民主主義の一つ」と理解していたことは興味深い。生活を立て直し、大衆を救済することが民主主義の役割であり、そこに尊徳を鑑とすべき理由があることを強調するのである。

五号(四八年一月)にも、「民主主義と尊徳」を寄稿した草場は、①万物尊徳の哲学、②二元対偶の哲学、③一円融合の哲学、④譲道の哲学、⑤生産勤労の哲学、⑥勤労の社会性、⑦勤労デモクラシーの項に分けて、論述を展開した。

「勤労デモクラシー」の項では、「われわれは、尊徳の民主的思想哲学が単なる言論や口頭や理論や主張のデモクラシーにあらずして、権利や自由の問題にあらずして、万人がともに生き、万人がともに人間として幸福になつていく、実践勤労のデモクラシーなることに帰結せざるをえないのである。自由デモクラシーや権利デモクラシーが流行している民主日本の今日、尊徳の民主的思想哲学が実に勤労デモクラシーとして、万人に先づ勤労に生くべきことをおしえ、生産デモクラシーとして、先づ生産すべきことをおしえているのではないだろうか(二二―二二頁)」と主張した。

ここで「単なる言論や口頭や理論」を批判し、「実践勤労」を重視する姿勢は、戦時下で「行」(実践)を伴わない教育を批判していた草場の思想が、戦後にそのままスライドしているかにも見える。

その後も、草場は同誌を舞台に「民主主義」を説き続けるが、ここでは、「特集号 農村民主化と尊徳哲学」と銘打たれた二巻一号（四九年七月）の目次を紹介するに留めたい。

第一 農業農村農家の封建性（一 農村と日本再建、二 農業の封建性、三 農家の封建性、四 農村の封建性）。第二 民主的人間の哲学（一 人間二問（ママ）の哲学、二 言論自由の哲学、三 凡人の哲学）、第三 天道人道の哲学（一 多数決の哲学、二 真理の哲学、三 進歩の哲学）、第四 選挙の哲学（一 政党の哲学、二 投票の哲学、三 個性の哲学）、第五 世界平和の哲学（一 贖罪の日本、二 うたぬ心、三 勤勉正直、四 平民）。

## 2 二宮尊徳の思想と「平和主義」

草場は、創刊号で、前年四六年一月三日に公布されていた「日本国憲法」の「平和主義」戦争放棄」の思想を、二宮尊徳が先取りしていたかの解釈を示していた。すなわち、尊徳が実践した報徳仕法は「自他共に救ひ興し、且つ永久に敗れない復興の道ではないだろうか。「うつ心あればうたる世の中よ うたぬ心のうたるはなし」との先生の歌は、戦争を永久に否定する心であり、「受けえたる徳をおのおのゆづりなば四海の間父子のしたしみ」とは、世界同胞一家への道を示すものである（二三頁）」との解釈がそれに当たる。

草場が、尊徳（の思想）と「平和」を結びつけて語る部分をもう少し紹介したい。

まず、一九四九年の「巻頭言 闘争か 互譲か 推譲か」（二巻三号、四九年九月）である。「第二次世界大戦は、ファシズムと国際主義の決戦であった。今や人類は、国際主義、世界同胞主義一体への時代にはいつている〔中略〕然るに、弱肉強食の原理にたつ生存競争や闘争の人生観 処世観が今日なお、真理であるかのように横行しかつ歩しているのは、

何たることであろうか。〔中略〕互譲が推譲の原理たるを自他一円、一円融合、一円究極にまで深まったときに、はじめて世界一円人類同胞のインターナショナルリズムの世界一体性がけん現されるのではないだろうか。

一九五〇年三月の「巻頭言 平和の信念に徹せよ」（三巻四号）では、こう言い放った。

「国際情勢は日に月に、全地球を冷戦の戦場たらしめていく。〔中略〕われわれは戦争放棄を自ら憲法に堂々と宣言した戦争否定の民族である。その民族がすぐに戦争のデマを言いつぎ語り流す。これ、その心に戦争否定の信念根柢なく、その平和論に哲学的論拠がないからではないか。否、戦争の残虐惨禍をしみじみと身につけていないからであろうか。〔中略〕「打つ心あればうたる世の中よ うたぬ心のうたるはなし」の心に徹するとき、世界に敵なく世界に敵国はない。日本は史上にかつてないこの「打たぬ心」の国を戦争放棄において宣言したのである。日本人にとって世界に敵はない。この敵なき国を侵略するものは悪魔である」。

同年六月号（三巻六・七号）では、コラム「良書の手びき」で「きけわだつみの声」を紹介している。曰く「この戦没学生の手記は、戦争中に死んでいった若人たちの真実の記録であり、地の叫び、魂のうめきである。〔中略〕戦争による最大の浪費は物や金でなく、この若人たちの青春と生命の浪費である。〔中略〕かかる意味から、この本は「戦争放棄の日 本国民がよくよくよむべきもの〔中略〕特に最近戦争のことを忘れてけろりとしていた人々に、のんきな戦争ばかりしている政治家に、文化生活謳歌する紳士淑女に、深遠な学理に耽る大学教授に〔中略〕ぜひともよまれてほしいのである」（三九―四〇頁）。

さらに、同年八月号（三巻八号）には「永久平和の哲学―内村鑑三の非



戦論と二宮尊徳の平和論」を載せ、「軍国日本の滅亡の預言者内村鑑三はまことに預言者であったのでありますが、われわれが求めるのは、いまや「永久平和」の預言者内村鑑三でなければなりません。人類に戦争絶対廃止の日来ることを信じていた内村鑑三が、戦争絶対廃止の預言者たることこそ、今の日本に対しての最大のホープであります」（七頁）と日露開戦反対で知られた内村鑑三の思想を激賞した。

草場が戦時下において「皇民化教育」を鼓吹していたことは前章で触れた通りである。その反省に基づく行動か否かの判断は直ちにできないものの、一九五〇年前後において、「戦争否定」を強い口調で訴えていたことだけは間違いないのである。

### 3 『報徳青年』誌における農民・農村文化向上への夢

『報徳青年』には文化人の文章がしばしば載せられていた。創刊号の武者小路実篤「よき農民に」・柳宗悦「農と美」、二号の宮沢賢治（一九三三年に逝去）「精神の歌」、八・九号合併号の高村光太郎「農生活即芸術」、宮沢賢治「農民芸術の本質」などである。一瞥して気付くことは、「農」に関わる文章が多いことで、この雑誌が農村青年を主たる対象としていたことを改めて確認できる。

とりわけ、宮沢賢治の作品は、二号（四七年六月）から六卷九号（五三年九月）までの二五回にわたり、登場している。一部のタイトルを掲げると、「農民芸術の生産者」、「観農菩薩心経（雨ニモマケズ）」、「野の師父」などで、詩形式、また評論的な文章が好んで掲載されていた。

三卷二号（五〇年二月）の巻頭言には「農民芸術概論綱要」が掲げられた。「われらに要るものは、銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱である。／われらの前途は輝きながら険峻である／険峻のその度ごとに四次芸術は巨大と深さを加へる／詩人は苦痛をも享樂する／永久の未完

成 完成である。／理解を了へば、われわれは斯かる論をも棄つる／畢竟ここには宮沢賢治一九二六年のその考へがあるのみである」。

この号の「編集部たより」では、「近時、農村恐慌の波にあらはれて、我等の同志諸兄の奮闘のさま〔中略〕身近に感じて居ります。そして、我々は日本農業人として、共に手と手を取り合ひ、宮沢賢治先生の詩の如く、「詩人は苦痛をも享樂する」程の詩と夢を通じ合はうではありませんか。同志諸兄の健康と屈せざる明朗な建設の闘ひを心から祈ります（一四頁）」とコメントされていた。

さらに「編集後記」においても「巻頭の宮沢賢治先生の詩の一節「詩人は苦痛をも享樂する」は、何という大きな豊かな詩心であります。その心はそのまま二宮先生の貧窮に屈せず、天地自然の理法に人道推譲勤労の大道に生きる心であります。私共は苦痛をも、試練に置き換える、不断の努力精進を怠りません（四二頁）」と、重ねての解釈がなされていた。これらから、「農村恐慌」に見舞われている読者（農民）の「苦痛」を、尊徳や賢治の「苦痛」と重ね、読者の奮起、また「夢」の実現を支えようとしている事が窺えるのである。

このように『報徳青年』が文学者の作品を積極的に掲げたのは、創刊の「概文」中にあった（本雑誌は）報徳の研究をしますが、政治・経済・思想・文芸・科学等ひろく取扱つて、青年の眼界を高くひろく大きくしたい」という趣旨に即したものと思われる。本稿で検討する暇はないが、どのような文化人の、どのような作品が、農村青年を鼓舞する素材と考えたのかは、きわめて興味ある課題である。

一方、草場は、青年たちの「恋愛」などについても積極的に論じている。五〇年三月号は、「エロスの哲学 恋愛憲法」と銘打つ特集だった。同号の「編集後記」は、本特集が「エロ本や猥本でないことは一頁よんでも分りますが、再読すれば、そこに流るる高遠に深玄、青春と愛の哲

学が読者の心をうたずにいないでしょう。「しかしわれわれに一番切実にして痛いのは「農村の女性を解放せよ」の草場先生のマザマザと描かれるわれわれの母と妻と姉と妹の生活と、そこに叫ばれる先生の農村革新の地と涙の叫びではありませんか。新しい時代を双肩に負うわれわれ青年にとって、この「農村女性解放」の叫びは、先づわれわれが、第一に着手すべき日常生活の革新の方途を示されたものであります(四二頁)」とあった。

つまり、この特集号の真義は、「農村女性解放」の叫びにあったと位置づけられているのである。ここでの議論の検討も措かざるを得ないが、草場が、農村の課題をそこにも見ていた事は明記しておきたい。

#### 4 『報徳青年』誌の「講和」に対する態度、およびその後

「講和近し、民族回心せよ」の文言が表紙に刻まれた三巻一号(五〇年一月)には、「報徳青年運動本部」の名義で、「民族回心運動」なる論考が掲載された。「敗戦の懺悔未だし」、「平和民主化未だ成らず」、「断食回心せよ」との挑発的とも言える三つの見出しからなるが、その一部を紹介すれば、以下の通りである。

「表にアジア民族の解放共栄を唱えながら、裏に冷血残酷なる殺戮暴行をほしいままにした東洋鬼日本民族は、無条件降伏、被占領四年有半、未だその罪業に懺悔すること浅く、反省自らむちうつこと薄く、なお敗戦を運命に帰し、他に転嫁しているのではないだろうか。しかも厚顔すでに講和を云々している、無知無慚も甚だしとすべきではあるまいか(二頁)」。

「敗戦こそ天譴であり、人類の十字架である。この秋、日本民族は深く内に自らを省みて、生か死か渾身をかたむけて、断食自浄して、回心新

生すべきである。二宮先生の勝躅〔引用者…しようちく〕優れた足跡に倣って、断食回心し、静かに世界全人類のわれを歓迎迎ゆる日を待とうではないか(四頁)。

ここで草場は、日本の暴虐さを指弾する際に中国が使った「東洋鬼」の語を用いるなど、激越な言い回しをしながら、「断食回心」の気概を持って、真摯に戦争を反省しない限り、世界全人類が歓迎してくれない、と訴えるのであった。

以上から見るように、『報徳青年』誌における「民主主義」、「平和主義」論の展開、また周辺諸国に対する贖罪意識の表明は想像以上のものがある。一九四七年の「二・一スト中止」以降、「逆コース」が進むと一般に言われるが、同誌には、「反共」的意識は垣間見えるものの、「民主主義者」尊徳を楯として、日本の「新建設」を図ろうとする強い意志が継続し続けたと見なしてよいだろう。

筆者蔵の『報徳青年』の最終号は、七巻一号(五四年一月)である。その表紙には、「報徳青年」のメインタイトルの右に「尊徳百年祭をめざして」、左に「日本運命わかれみち」の文字が刻印されている。

巻頭言には「独立三年目、日本も大分おちついてきましたし、日本人の自覚も出てきたのです。しかも今年はわかれ目とされていますが、このときに、独立精神、復興仕法の二宮翁を日本国民が思いいたるならば、そこにはつきりと民族精神と誇りと自信が湧いてくるのです」とあった。

また、草場弘の署名が入った論説「日本運命わかれみち」では、「二宮翁いわく、運命とは自分が運びこるがして行くものであると。日本運命わかれみち、一九五四年を、日本復興へ運びこるがしてゆくのは、八千五百万日本人の勤勞 分度 推譲 協力 合理性の生活態度ではなからうか。〔中略〕全国民よ。日本の国家と民族を、階級分裂、経済崩か

い、道義沈淪から救って、真の独立民族国家としようではありませんか（八頁）」と呼ばれていた。

草場のこの文章には、ここまで筆者が意識的に拾い上げてきた「民主主義」や「平和主義」の文言は見えない。逆に「日本の国家と民族」を強調し始めていることから、論調に何らかの「変質」が生じてきた可能性もある。しかし残念ながら、これ以降の『報徳青年』誌は確認できておらず、その後の展開は不明である。

この号の「編集後記」には、経済的な問題により、前号にあたる「第六卷十、十一、十二号を休刊」したことの詫びが載せられていた。こうした事情も勘案すれば、同誌は、広汎な社会的な支持（経済的安定）を得ることができず、まもなく廃刊に至ったと考えられるが、それは今後の調査に待つほかない。

一方、草場弘の「その後」については、いくつか判明している。草場の妻・孝は、「敗戦の生んだ捨児混血児の養育に当たっている社会哲学研究所」<sup>30</sup>の運営に関わっていた。この研究所は、一九四三年に創設され、一九四六年からは児童福祉施設として再出発し、現在の「東京恵明学園」に繋がっているとされる。その定款によれば、一九五二年段階で、草場は恵明学園の理事長であった。<sup>31</sup>

これに関連して、『読売新聞』一九四五年六月一日付に「戦災孤児に正しき光明を／悲痛の運命を拓く／国児」として養育／若き教育者の新提唱」という記事が載せられていた。ここでは「教学錬成所の草場弘」が、戦災孤児のための「国立国児院」を作るべしと提唱し、厚生省などが検討している由が書かれていた。すなわち、草場は、戦災孤児の救済にも関心を持ち、それが妻とともに恵明学園の経営に当たった事に繋がったと考えられるのである。

さらに筆者が驚かされたのは、草場を「戦災孤児の親」として、「偉人

伝」として取り上げる書籍があったことである。本稿で見たごとく、草場が報徳青年運動に注いだ労力は尋常ならざるものであったと思える。それに加え、同時期に、他の「社会活動」にも関与していたとするならば、その精力ぶりには脱帽するほかない。

草場のその後の足跡について、現状で確認できる最後の（晩年の）資料は、駒沢大学曹洞宗宗学研究所の学術雑誌に掲載した「日本民主主義の系譜―道元と尊徳」という論文である（一九七〇年）。この中で、草場は、日本の民主主義の源流を聖徳太子に定め、宗教においてそれを表現したのが道元と親鸞であり、「百姓二宮金次郎」がそれを継ぐ者と見た。そして、尊徳が曹洞宗であったことを踏まえ、「道元の曹洞宗はその自力の最たるもの」で、「尊徳の人物は、日本人にしては珍しく独立自尊の、文字通り民主的な人柄である」とまとめている。<sup>32</sup>

つまり、七〇歳になった草場は、その時点においても、尊徳を「民主主義の系譜」に位置付ける言論活動をしており、その点については、『報徳青年』時代の評価を継続させていた事が確認できるのである。

#### 四 むすびに代えて

本稿は、敗戦直後に新しい報徳運動を展開した『新建設者 報徳青年』誌とその主宰者草場弘の言説を、きわめて粗削りな形で、一瞥してきた。その結果、同誌が二宮尊徳の論説や評価と結びながら、「民主主義」や「平和主義」、さらには「戦争への贖罪」を意外なまでに強く語っていたことを確認できた。同誌の読者数は必ずしも多くなかったが、「日本を再建する念願に燃えてゐる」農村青年の一部に、それらの主張はある程度の影響を与えたのではないかと想像する。

一方、この運動を率いた草場弘の個性は実に強烈なものであった。本



論中では触れなかったが、一九三一年に発刊した最初の著作『教育者は悩む』の出版記念講演会には、千人の聴衆を集め、そこで「教育十字軍の結成」を呼びかけたという逸話も残っている<sup>④</sup>。とにかく相当に熱情的な人物であったようである。

教育史家の長浜功の草場批判は「はじめに」で見たが、別の箇所の批判も引用したい。すなわち、戦後、報徳青年運動に転じた草場について、長浜は「この見事な転向は一種の『芸術』に近い。(略)とにかく調子がいいのである。自己の戦争責任など全く眼中にないのだ。(略)まるで他人事のように彼の口舌が続く。もう、毎号のように「民主化」や「革新」論を草場は書きまくる。引用は全くの無駄になるから、もう敢えてしない<sup>⑤</sup>と匙を投げ、「草場論」を放棄してしまっている。

ここで視点を変えてみよう。近年、第一次世界大戦以降の戦時体制は「全人民を国民共同体の運命的一体性というスローガンのもとに統合しよう」と試みた。(略)第二次世界大戦後の諸国民社会は、総力戦体制が促した社会の機能主義的再編成という新たな軌道については、それを採択し続けたのであり、この軌道の上に生活世界を再現したのである」と捉える見解がある。山之内靖が提唱した「総力戦体制」論である<sup>⑥</sup>。

この観点に注目するならば、匙を投げ出さずに、草場を再検討してみる意味もあるのではないかと考えられる。ただこれは忽々に論ぜられる問題ではない。その適否を含め、次なる検討課題としたい。

一方、筆者の本来の研究テーマである「近代報徳思想／運動」と「戦後」という側面からは、『報徳青年』誌を改めて丁寧に精査していく作業が必要になってくる。また、大日本報徳社が「戦後」発刊していた『報徳』誌と照らすことで、その特質がより明確になることは間違いないが、それも今後の課題となる<sup>⑦</sup>。

【付記】本稿作成にあたり、須田将司氏（東洋大学）、飯森富夫氏（報徳博物館）から関連史料に関わる貴重な助言を得た。記して、感謝を申し上げます。

## 注

- ① 一八七五年創設の「遠江国報徳社」が、一九一二年に改名。本部は静岡県掛川に置かれた。
- ② 見城悌治『近代報徳思想と日本社会』ペリかん社、二〇〇九年。
- ③ 八木繁樹『報徳運動一〇〇年のあゆみ』緑蔭書房、一九八〇年、「増補改訂版」一九八七年（以下では、「二〇〇年」と略す）。
- ④ 筆者蔵の四五冊に含まれない四冊は、北大所蔵分で補うことができ、仮に五四年一月の発刊が最後ならば、全体で五一冊となる。そうであれば、現状での「欠本」は二冊となる。
- ⑤ 武藤正人が、加藤仁平（東京文理大学教授）が『報徳青年』に関わったという事実だけを触れている（須田将司・武藤「戦後福沢国民学校における報徳教育の再評価―民主主義・民主教育への「転回」」『東洋大学文学部紀要 教育学科編』三七号、二〇一一年、四三頁）。また注⑥の長浜が草場を論ずるなかで『報徳青年』所載の論文をいくつか取り上げている程度である。
- ⑥ 長浜功『国民学校の研究―皇民化教育の実証的解明』明石書店、一九八五年。なお、寺崎昌男・戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育』（東京大学出版会、一九八七年）でも、前田一男「民間団体による「教育と行の講習会」」および寺崎「草場弘の教師論」が、やはり批判的に取り上げられている。
- ⑦ 前掲、見城『近代報徳思想と日本社会』、一四頁。
- ⑧ 前掲、見城『近代報徳思想と日本社会』第八章「近代報徳思想と植民地開拓」。なお、筆者は、戦時下の報徳社が、甘藷などの食料増産運動などに貢献した側面については無視できないと考えている。見城「一九三〇年代における報徳思想と「国民生活建直し運動」」『日本経済思想史研究』一七号、二〇一七年）は、戦時下における報徳思想のありかたを「国民生活」

に即して考えようとした。

- ⑨ 須田将司「一九三〇年代における報徳教育の創出過程に関する一考察」『東洋大学文学部紀要 教育学科編』三八号、二〇一二年、須田「昭和戦前期における福沢小学校・国民学校の報徳教育」『地方教育史研究』三三三号、二〇一二年、須田「一九三〇年代における学校報徳社・児童常会の端緒」『日本の教育史学』五七号、二〇一四年、須田「報徳教育の錬成論的な形成と展開―加藤仁平のイデオログ性に着目して」『東洋大学文学部紀要』四一号、二〇一五年、須田「一九三〇年代半ばにおける「新興報徳運動」と報徳教育の広がり」『日本教育史学会紀要』六号、二〇一六年。
- ⑩ 前田一男「教師の再教育と錬成」(前掲『総力戦体制と教育』、五九頁)による。須田将司「日中戦争期における「学校常会」論の広がり―培地となった「国民訓育連盟」と「日本青年教師団」」『日本の教育史学』五九号、二〇一六年、も参照のこと。
- ⑪ 国民訓育連盟編『皇民錬成 師道行』第一出版協会、一九四〇年六月。
- ⑫ 小原国芳編『国民学校研究叢書第二卷(皇国の道と教育)』玉川学園出版部、一九四〇年五月。巻頭の山梨勝之進「皇太子殿下の御入学に際して」には、「学習院に御入学遊ばされました」とあるため、講演会は四月半ば頃に開かれたと推測される。
- ⑬ 国民訓育連盟編『尊徳哲理の教育』第一出版協会、一九四一年七月、三〇四頁。
- ⑭ 同右、九四〇―九七頁。
- ⑮ 草場弘「大東亜戦争下の国民教育」(国民訓育連盟編『大東亜戦争と教育者の決意』一九四二年、一七―一八頁)。
- ⑯ 前掲、長浜功『国民学校の研究』、二九頁。
- ⑰ 前掲、見城『近代報徳思想と日本社会』、三六二頁。
- ⑱ 前掲、『二〇〇〇年』、四〇九頁。
- ⑲ 前掲、『二〇〇〇年』、四〇九頁。なお、『二〇〇〇年』には四月二八日に河井も臨席していたと記載されている(四一六頁)。しかし、尚友倶楽部編『河井弥八日記 戦後篇上』(信山社、二〇一五年)によれば、四月二八日条には、高松宮と会った記録はない(七八頁)。一方、六月一日条には、インボーデンの来訪が詳細に書かれ、「イ氏は素直に所見を披瀝し、終始<sup>トク</sup>厚意を示され、再来を諾して去れり」(二七四頁)との評価が残っている。
- ⑳ 前掲、『二〇〇〇年』四一八、四二三頁。傍点は筆者による。
- ㉑ 奈良岡聰智「解説 河井弥八と戦後日本社会の出生」(前掲『河井弥八日記 戦後篇上』五八二頁)。
- ㉒ 一九四八年における小学校教員の初任給は二千円だった(週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史 上』朝日文庫、一九八七年、五七七頁)。
- ㉓ 『二〇〇〇年』の索引によれば、草場の名前が出てくるのは、さきに挙げた一回しかない。また『河井弥八日記』(前掲)の一九四六、四七年に、草場の名前が出てくるのも一度だけと思われる。すなわち、一九四六年二月四日条に、掛川で行なった「報徳研究会諸氏の需に依り、時局に関して一時間半に亘り講演す。草葉<sup>クサハ</sup>弘、菅野恵助氏及目黒常信氏より質問あり」(三六七頁)がそれである。
- ㉔ 前掲、須田将司「報徳教育の錬成論的な形成と展開」などを参照。
- ㉕ 加藤仁平「報徳に生きる」日本図書文化協会、一九五五年、二〇四頁。これについては、須田将司氏からご教示をえた。
- ㉖ 報徳博物館蔵。同紙に関連叙述があることも、須田氏からご教示いただいた。
- ㉗ 見城「日本国憲法発布日を紀元元年元旦とすべし」『千葉史学』七二号(二〇一八年)の「歴史随想」で紹介した(一〇―一二頁)。
- ㉘ 『報徳青年』一卷一号(一九四七年五月)、一四頁。
- ㉙ 千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程の張永嬌氏は、筆者からの資料提供を受け、研究報告「戦後における「雨ニモマケズ」の受容―雑誌『報徳青年』を中心に―」を、千葉大学日本文化学会(二〇一八年九月二六日)で行っている。なお、文学者・宮沢賢治を農業に関連させて考察した著作に、大島丈志『宮沢賢治の農業と文学―過酷な大地イハトープの中で』、蒼丘書林、二〇一三年、がある。
- ㉚ 「箱根の山荘へ」『報徳青年』二巻三号、一九四九年九月号、裏表紙。
- ㉛ 「東京恵明学園定款」(二〇一七年)には、組織変更当初(一九五二年)の役員名があり、草場は理事長とされていた。なおこれを載せている東京恵明学園のHPによれば、創設者は草場孝で、一九四三年創設の社会学哲学研究所が、一九四六年から児童福祉施設として再出発した旨が書かれてい

る（正式な認可は一九五〇年）。<http://www.t-keimei.or.jp/jyoho/teikan.pdf>

③② 福島恒春『日本の社会につくした人々（私たちのほこり 2）』（東西文  
明社、一九五六年）は、「農村改革者 宮沢賢治」、「荒地開拓者 二宮金  
次郎」など、全部で一七名を取り上げ、その最後に「戦災孤児の親 草場  
弘と田治林太郎」の章が置かれている。田治は、関東大震災孤児だっ  
たが、青山師範で草場の教えを受け、学園園長を任された人物である。筆者  
の福島は、全日本中学校校長会会長などを歴任した教育者で、『日教組を  
切る』（一九七二年）なども出版している。

③③ 『宗学研究』一二号、一九七〇年、三五―三六頁。論文中には、駒沢大  
で非常勤講師を勤めている旨が示されている。なお、この論文は、一九六九  
年一月に駒沢大学で行われた「日本仏教学会学術大会」で行った報告  
「道元と尊徳」を活字化したものである。

③④ 上沼八郎監修『昭和前期教師論文献集成 別巻 近代的教師像の形成と  
「教師論」の展開』（ゆまに書房、一九九三年）では、この「集成」が復刻  
した三一冊の解説を、上沼八郎が行っている。第七巻に草場『教育者は悩  
む』（一九三二）、第二二巻に草場『教育者・世を導かん』が収められてお  
り、この逸話は前者の解説文による（二六頁）。なお、上沼によれば、草

場は、一九四五年二月に日本教員組合に加盟し、右派を組織したとい  
う（一一三頁）。

③⑤ 前掲、長浜功『国民学校の研究』、五六―五七頁。

③⑥ 山之内靖「方法的序論」（山之内靖ほか編『総力戦と現代化』一九九五  
年、柏書房、一二頁）。なお、同書が所収する大内裕和「教育における戦  
前・戦時・戦後」は、非合理と思われる戦時期において、教育科学の  
導入・発展に中心的役割を果たした阿部重孝の営為が、戦後の教育制度改  
革にも影響を与えたことを指摘している。この事例とは性格を異にする  
が、草場の場合、戦後も戦後も青年教育を主導していたという点を含め、  
その「連続」性の内実を検討しても良いかもしれない。

③⑦ 報徳運動の戦中と戦後を跨いで考察しようとする論考に、前田寿紀「敗  
戦体験後における報徳主義者佐々井信太郎の社会建設への提言―普遍的  
原理に着目して」（『千葉県社会事業史研究』二九号、二〇〇一年、前掲、  
須田将司・武藤正人「戦後福沢国民学校における報徳教育の再評価―民主  
主義・民主教育への「転回」―」などがある。

（千葉大学国際教養学部准教授）